友人諸兄姉　　平成２５年１２月１０日

北田泰治

台湾（烏来、新竹）見聞録

平成２５年１０月２１日から３泊４日で丸橋夫妻、安西君と４人で台湾に行ってきました。今回初めてＬＣＣ（格安航空）に乗りました。旅のコンセプトは少数民族、温泉、鉄道、グルメです。

当初、南投県の秘湯「東埔温泉」を訪れる案を検討しました。ここはブヌン族が住む鄙びた温泉地です。日本統治時代は「トンボ温泉」と呼ばれていました。ここに行くツアーはないので、ＬＣＣを利用して高雄に飛び、そこから新幹線で行く計画でした。

しかし、適当なＬＣＣが見つからないため、旅行社の格安ツアーに切り替えました。各社を調べた結果、「さわやかプラス」社の３泊４日フリ―プランに決めました。料金は朝食付きで、なんと２７，８００円でした。中２日のフリー期間を利用して、東埔温泉に行くことを考えました。ところが、日程的にかなり厳しいため、この案を断念し、台北近郊の烏来と新竹に行ってきました。いずれ機会があれば、東埔温泉に行きたいと思っています。

１．　話題のＬＣＣ

今回初めてＬＣＣに乗りました。何かと話題の多いＬＣＣですので、不安と興味がありました。われわれが乗ったのは「スクート航空」のＢＷ７７７型機です。この航空会社は、シンガポール航空（ＳＱ）の子会社です。機材はＳＱの中古機を使っています。

シンガポールに拠点を置き、主としてアジア、オセアニアに運航しています。われわれが利用した便は、シンガポール～台北～成田を折り返しています。成田を１２時１０分に発ち、台北には１４時２０分に着きます。夕方にはホテルにチェックインできますので、これはこれで問題ありません。

問題は帰国便です。シンガポールを深夜に発ち、台北で乗客を乗せ、成田に向かいます。台北の出発は朝の６時５０分です。ホテルは早朝の４時に出なければなりません。３泊４日とは言え、最終日はただ空港に向かうだけです。これは少々キツイ出立です。

７７７型機は、通常４００座席前後（航空会社によって差がある）と言われています。われわれが利用した７７７は４２０座席でした。もっと詰め込んでいるのかと思っていま

したが、それほどではありません。座席が狭くてエコノミー症候群になるなどの指摘がありますが、この機は普通のエコノミークラスと変わらない感じでした。

ＬＣＣの特徴は徹底したコストダウンにあります。食べ物、飲み物、毛布などすべて有料です。ＴＶやモニターも付いていません。映画やゲーム、音楽を楽しむのにタブレットが用意されています。これも有料です。自分のタブレットを使うことも出来ますが、回線使用料を取られます。これらの料金が高いのにはびっくりです。３５０ｍｌの缶ビールが５１０円でした。サンドイッチは７２０円、ビーフすき焼きは２，０００円です。

機材は中古機と言われています。しかし、きれいに改装されていました。座席はすべてエコノミーです。１，５００円を追加すると、座席の広いビジネスクラス並みの席が利用できます。要するに何もせずただ座っていればお金は掛かりません。何かを頼めば高くつくのがＬＣＣということです。機内はやることがないので、寝ている人が多く、静かなものです。短時間のフライトは耐えられますが、長距離は問題でしょう。

客室乗務員のユニフォームは、シンボルカラーのワンピースで派手さはありません。機内にはなんにも付いていません。シンプルと言えばシンプルです。これはこれですっきりしていてよいと思います。機内食や飲み放題のアルコール、きれいなフライトアテンダントに会える楽しみはありません。フルサービスを期待するか、経済性を優先するかの選択です。往復ともほぼ満席で、乗客は圧倒的に若者でした。ＬＣＣを使いこなしている感じでした。

ＬＣＣは近い将来、鉄道並みに誰もが気楽に利用できる交通手段になるでしょう。そのためには利便性を高める必要があります。チケットの購入方法、チュックイン時間の短縮、飲食物の機内への持ち込み、機内食のコンビニ並みの料金化などです。インターネット弱者でも利用できるようにすることも課題です。

２．　第１日　（桃園国際空港、金品茶楼）

（１）渋滞解消

初日は予定通り、午後２時過ぎに桃園国際空港に着きました。台北には桃園の他に松山国際空港があります。前者が成田空港で、後者が羽田空港に喩えられています。松山空港は市内にあるため、都心まで１０分程度で行けます。このため松山便は人気があります。

桃園は成田同様都心から離れています。以前は台北市内まで１時間ぐらい掛かっていま

した。久しぶりに桃園からバスで市内に向かいましたが４０分足らずで着きました。タクシーなら３０分は掛からないでしょう。随分便利になったのにはびっくりしました。かつて渋滞したのは料金所でした。これはＥＴＣ化が進んだことと高速道路が複線化したためだと思います。これなら桃園も苦になりません。それに比べ、成田のアクセスの悪さはお話しになりません。

（２）金品茶楼

食事は朝食以外付いていません。昼食、夕食は自前で探さなければなりません。これもまた楽しみです。今回は小籠包にこだわってみました。小籠包は手軽に味わえるグルメとして、台北ではすっかり定着しました。宇都宮の餃子のようです。味を競うようになり、コンテストもあるくらいです。

鼎泰豊だけでなく、新しい人気店が増えてきました。「金品茶楼」もそのひとつです。この店は、茶葉の老舗「金品茗茶」が、２００８年にオープンした小籠包と江浙料理のレストランです。“超極薄皮小籠包”がウリです。評判通り美味しい小籠包でした。

紫米焼売もうまかったです。本家がお茶屋さんだけあって、台湾の銘茶がフリーで飲めます。中華レストランとは思えぬ清潔感のあるモダーンな店です。

（３）迪楽商旅（The Dealer Hotel）

宿泊先は、延平北路にある「迪楽商旅」というホテルでした。英名にあるように、よく言えばビジネスホテルですが、ラブホテルといった方が当たっています。とにかく狭くて

不便な場所にあります。料金からすれば仕方がありません。いつもはコンビニでビールなどを買い、部屋で“反省会”をやりますが、狭くて４人が座れるスペースがありません。今回は夕食時に反省会を済ませ、部屋ではやりませんでした。

延平北路は古い問屋街で、レトロタウンと称され、繁華街から離れています。最寄りの駅までは歩いて１５分から２０分ぐらい掛かります。道が分かりづらいため、夜はタクシーを利用するしかありません。

よいところは、従業員が気さくなことと、朝食がうまかったことです。家庭料理のバイキングでしたが、品数も多くて十分でした。

３．　第２日　（烏来、龍山寺、西門町、點水楼）

（１）トロッコ列車

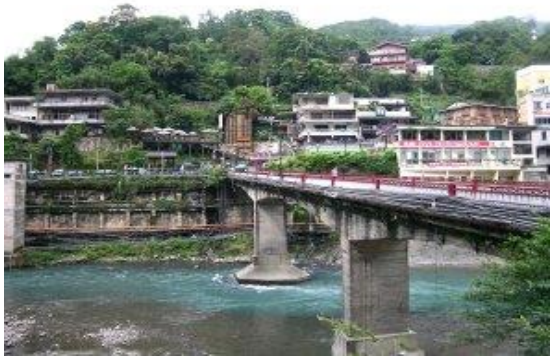
烏来は台北から約３０ｋｍ南にある小さな温泉郷です。先住民族のタイヤル族が住む里山として古くから知られています。野牛の会の１０周年記念旅行でも訪れました。小生の駐在中には、来客を何度か案内した思い出の場所です。今回は安西君のリクエストで行くことにしました。

タイヤル族のおばあさんと機織りする娘さん

台北駅からＭＲＴで新店に行き、そこからバスで烏来に行きました。新店は安西君の勤務先が、台湾造幣局に紙幣の印刷機を納入した際、立ち合いで訪れたところだと言っていました。バスは右手の渓谷沿いに上っていきます。箱根の山のぼりのようです。やがて左手に民族衣装姿のタイヤル族の銅像や看板が見えてきます。いかにもそれらしい雰囲気が

漂ってきます。

　バス停から烏来老街を抜け覧勝大橋を渡るとトロッコの始発駅に着きます。タクシーの勧誘を断り、トロッコ列車に乗りました。切符売り場のおじさんが何事か尋ねました。分からないというと、外に出てきて料金表の掲示板を指さしました。６５歳以上はシニア割



引だと書いてありました。“あなた方はシニアか？”と尋ねたことが分かりました。そうだと答えると、５０元が３０元（約１００円）になりました。日本ではＩＤの提示を求められますが、台湾では相手を信用して自己申告を認めてくれます。もっとも顔を見て、分かったのかもしれません。

トロッコは１９２８年、木材運搬用に敷設されました。その事業がなくなってから観光用に転用されました。初期のトロッコは２人乗りで、原住民の運搬人が手押しで動かして

いました。１０周年旅行の写真には、２人乗りの手押しトロッコが写っています。満員で乗れなかったため往復とも歩きました。その３年後（１９７４年)に自動化され、車両は小型になりました。現在は３両連結で運行しています。遊園地の列車を連想させます。

その時歩いた道は、今はハイキングコースになっていて、何組かのハイカーに出合いました。今回も帰りは歩きました。

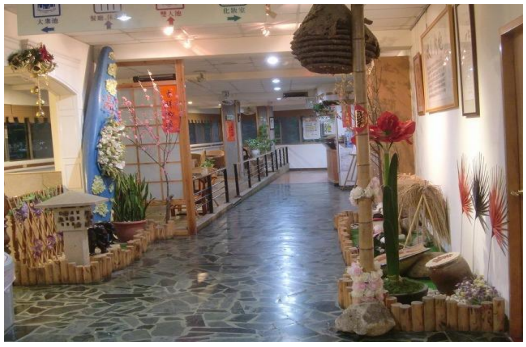
（２）高砂義勇隊の碑

山道をさらに行くと「台湾高砂義勇隊英霊碑」があることを帰国後知りました。この碑は第２次大戦中日本軍に従軍し、南洋諸島のジャングルで、勇猛果敢に戦った義勇隊の戦死者を慰霊するため、タイヤル族の酋長だったターナ・タイモ（日本名武田義弘元陸軍兵曹）が発案したと言われています。彼は比島派遣軍司令官だった本間雅晴中将が、戦犯として銃殺されたことを悲しみ、中将の「辞世歌」を碑に刻んで残すことを考えました。

ところがターナさんが完成を前に死去したため、遺族らが引き継ぎ、日本からの寄付も合わせ、平成４年に「高砂義勇隊慰霊碑」として完成させたとのことです。碑の両側には日の丸と青天白日旗がはためいているそうです。碑の「霊安故郷」は、李登輝元総統の揮毫とのこと。いかにも親日家の多い台湾らしいエピソードです。

（３）小川源温泉

烏来に来た目的のひとつは温泉に入ることでした。温泉旅館でも日帰り入浴が出来ます。川原には水着着用ですが、無料の露天風呂もあります。われわれはクアハウス式の「小川源」という浴場（銭湯）に入りました。男湯と女湯に分かれ、泡風呂や打たせ湯、ジャグジーなど５つの浴槽があります。女湯には露天風呂もあったと丸橋夫人は言っていました。



日本人はわれわれだけでしたが、温泉好きの地元の人たちで賑わっていました。泉質は弱アルカリ性の炭酸泉で湯量は豊富です。館内にはレストランや休息室があります。廊下の一角には日本の灯籠がしつらえ、バーのカウンターには“榮川”の樽酒がありました。 福島県とつながりがあるのかもしれません。料金はタオルセット付きで３００元（約１，０００円）です。手ぶらでＯＫです。

（４）タイヤル料理

昼食は温泉街の「阿春」というタイヤル族の小吃店で食べました。ビールのつまみに川で獲れた小魚とエビの唐揚げを注文しました。これはなかなかいけます。地酒に粟で作っ

た“小米酒”という酒があります。甘酒に似た口当たりのよい酒です。

土地柄、山菜が豊富です。“野生過猫”とか“水蓮根”、“高山高麗菜”とか聞きなれない山菜があります。そのいくつかを炒めてもらいました。新鮮でした。名物は“竹筒飯”です。ちまきご飯を竹の筒に入れた感じです。“桂竹筍湯”というスープを飲みました。小指ほどの若竹が入ったスープです。これは実にうまかったです。

（５）龍山寺

烏来からの帰路、龍山寺に立ち寄りました。この寺は台湾最古の最も格式の高い寺院です。恋愛、学問、商売など様々な神様が祀られています。熱心な信者が大勢お参りにきています。ここに寄ったのは、仲見世を見たかったからです。浅草寺の仲見世商店街のような門前通りがありました。みやげ物店や屋台、ガラクタ市、ガマの油売りならぬ蛇使いが、毒ヘビに腕を噛ませ、その傷口に蛇の軟膏を塗る実演販売や、占い師、客引きなど雑多な商売で賑わっていました。いかがわしさ、胡散臭さがありましたが、庶民の姿を肌で感じることが出来ました。

ところが、その仲見世が消えていました。土地の人に聞いたら地下街に移転したと言っ

ていました。確かにＭＲＴ龍山寺駅の地下には、商店街がありました。店はこぎれいになっていましたが、かつての泥臭さはなく、下町情緒がなくなっていました。これも近代化の一環なのでしょう。ガラクタ市で掘り出し物を探そうと思っていましたが、果たせませんでした。

（６）西門町と修学旅行生

龍山寺をそこそこに西門町に行きました。西門町は台湾の原宿と呼ばれている若者のファッション・ストリートです。その名に恥じず若い男女であふれていました。ブラブラ歩

きながら“お茶でもしようか”と喫茶店を探しました。“マンゴー喫茶”というスイーツ専門店に入りました。マンゴーを使ったドリンクやアイスクリームが、この店のメインメニューでした。

２Ｆで晩飯の相談などしていたら、４人組の女の子が隣のテーブルに座りました。メニューを見ながら品定めを始めました。大阪弁で話していました。丸さんが“君ら、大阪から来たんか？”と声を掛けました。“はい、そうです。よく分かりますね”と返事が返ってきました。“聞けばわかるさ”とわれわれ。

そんなことがきっかけで話が弾みました。彼女らは大阪の公立高校の生徒でした。３泊４日の日程で台湾に修学旅行で来ていました。フリータイムを利用して西門町に来たようです。“マンゴーかき氷”を注文しました。これは山盛りのかき氷の上にマンゴーのシロップを掛け、２つのアイスクリームを乗せた台湾名物のスイーツです。よく下調べをしてきた様子でした。

宿泊先はシェラトン・ホテルでした。われわれのホテルとは雲泥の差です。“費用はいくらかかったの？”と聞いたら、親が出したので分からないとのことでした。よい時代になったものです。

小生の修学旅行は京都・奈良でした。もし海外旅行に行っていたら、その後の進路が変わっていたかもしれません。最近の若者は“内向き”と言われています。海外に出て見聞を広めることはよいことです。外国の第１印象は忘れがたいものです。失われた日本のよさを残しているのが台湾です。修学旅行生がこれに気付いてくれたら、修学旅行の目的は達せられるというものです。

親日家は旧世代に限りません。９０年代から「哈日（ハーズ）族」と呼ぶ１０代、２０代の若い“日本大好き族”が出現しました。これは、日本語を第２外国語として選択する者が９０％を超えていることが背景にあるようです。日本語教育を通じて日本の文化に触れる接点が増え、日本が好きになっていく人が増えているそうです。嬉しい話です。

（７）點水楼

夕食は「點水楼」という上海料理店に行きました。この店は２０１０年の小籠包コンテストで第１位になりました。“繊細で上品な小籠包”というのが受賞理由です。その小籠包がお目当てでした。その評価通り美味しい小籠包でした。

小籠包は本来、飲茶の１品です。お茶の点心（つまみ)、軽食といった位置づけです。鼎泰豊や金品茶楼は、小籠包がメイン料理ですから、いつ行っても違和感はありません。しかし、點水楼は本格的な上海料理店です。こういう格式のあるレストランで、ランチならまだしもディナーとして食べるのは場違いで、フルコースを味わうべきでした。時間設定のミスでした。

（８）博愛座

台北は交通機関が充実していてとても便利です。なかでもＭＲＴ（Mass Rapid Transit）は、縦横に路線が張り巡らされ、山手線並みの間隔で運行されています。料金が安くて時間が正確です。初乗り運賃は２０元（約６

６円）です。日本の“優先席”と同様の“博愛座”という座席があります。台湾の人は躊躇なく席を譲ってくれます。日本の優先席は“お年寄りや身体の不自由な方にお譲りください”と車内放送があるように、“お願い、依頼”という感じですが、博愛座は“労わる、おもいやる”という感じがします。この点では台湾人の方がおもいやりのある感じがします。

タクシーも安くて便利です。初乗り料金は７０元（約２１０円）です。都心からホテルまでは１００元前後で帰ることが出来ます。４人で乗ればＭＲＴ並みの料金です。

４．第３日（新竹、新光三越、丸林魯肉飯店）

（１） 素朴な地方都市

新竹には、台湾のシリコンバレーと呼ばれるサイエンスパークがあります。現役時代、ビジネスで何度か訪れました。しかし、肝心の新竹の街には立ち寄ったことはありません。

ここも「平埔族」という原住民の集落があったところです。かつて新竹城がありましたが、今では東門（重文）が残っているだけです。日本統治時代の建物や旧い街並が残っています。新竹駅は現存する台湾最古の駅で日本人の設計です。新竹は冬の季節風が強く吹くため、その風を利用して作ったビーフンが有名です。

新竹は台北から南西に約７０ｋｍ離れていますが、新幹線（高鐵）なら３０分です。われわれは「自強号」という特急列車で行きました。この列車は「莒光号」と並び一世を風靡したかつての花形列車で、全席座席指定です。往時はスチュワーデス並みの美人ホステスが、烏龍茶のサービスで車両を回ってきたものです。台北から１時間で、料金は１７７元（約５８０円）です。座席も広く快適でした。

（２）信仰の街

新竹は信仰の街です。狭いエリアの中に、東寧宮や城隍廟などいくつかの寺院が集まっています。なかでも城隍廟は新竹最大の寺院で城隍神を祭祀する廟です。“城”とは城壁のことで、“隍”は堀を指します。転じて都市の守護神のことです。“新竹城”を守るために建立されたと思われます。

廟内は線香の煙が立ち込め、神殿に供物を供え、跪いて一心に拝む人々で熱気に包まれています。廟内の神様は極彩色に彩られ、エンマ大王のように舌を出した神様や眉をつり

上げた神様など実に様々な神様がいます。まるで神様の集会所です。日本にも八百万の神がいますが、それが一堂に会することはありません。神々しさや厳粛な雰囲気はありませ

ん。ゲームセンターかアミューズメントパークのようです。天国と地獄が一緒になった感じです。

台湾人は信仰心の篤い国民です。どこの寺院に行っても、現世利益を求める多くの信者であふれています。台湾には道教、キリスト教、仏教、儒教などがあります。中心を成し

ているのは儒教、仏教、道教が融合した土俗的な民間信仰です。これは多神教です。先祖崇拝、巫術、鬼神、その他心霊及び動物崇拝が特徴と言われています。いろいろな神様がいて、様々な願い事をしているのは、こういう背景があるからでしょう。

城隍廟の周辺は門前町を成しています。名物のビーフンを売る店が周りを囲んでいます。廟内には屋台店があり、檀家や氏子で賑わっています。

われわれもそのひとつの店に入り、ビーフンと貢丸湯（肉団子）などを食べました。

（３）新光三越

城隍廟の出店でお土産にビーフンを買いました。新竹駅前にデパートの「太平洋そごう」があります。ここに立ち寄りましたが、目ぼしいものはなかったので、台北に戻り「新光三越」で買い物することにしました。

新光三越は、台湾では最大のデパートチェーンです。台北に９店舗の他、各地に進出しています。小生が駐在していた頃はありませんでした。その後台湾の財閥である新光実業と組んで成功したようです。新光実業は日哥電子の董事長だった張碩藩さんの出身会社です。スキャンダルで失脚した三越の岡田茂元社長の側近だった天野治郎氏が、辣腕を振るって合弁会社にしたそうです。

夕食までの時間を利用して、台北南西店で買い物をしました。南西店は南京東路を挟んで３店舗あります。日本と変わらぬ洗練されたデパートです。食品売り場のデパ地下も品揃えが豊富で買い物客で賑わっていました。この一角にはテーブル席があって、惣菜店で買った食べ物を広げて、家族やグループで食事を楽しんでいました。いかにも台湾らしい光景です。

（４）丸林魯肉飯店

最後の晩餐は、魯肉飯で有名な「丸林魯肉飯店」に行きました。この店は１Ｆがバイキング形式になっていて、昼間はサラリーマンの利用客が多いところです。

われわれは２Ｆの宴席で、フルコースのディナーを注文しました。９品のセットディナーでしたが、この他につまみで小エビの唐揚げ、当店名物の魯肉飯、それにデザートの３品をサービスで出してくれました。

前菜としてカラスミが出ました。久しぶりにうまいカラスミを食べました。カラスミは調理が難しい食材です。焼き方によって味が変わります。さすがに本職だけあって、見事な仕上がりでした。長方形に切った大根と合わせて食べました。にんにくの茎と合わせて食べる食べ方もあります。

東坡肉という豚の角煮も出ました。これは台湾料理の定番です。今回の旅行中に１度は味わいたいと思っていました。うまかったです。飲み物はいつもの通り、ビールと紹興酒でした。締めて２，９７０元でした。１人当たり７４３元（２，４５０円）です。

５．　親日国台湾

台湾は親日家の多い国です。その割には、台湾に関する報道は日本のマスコミには取り上げられません。台湾出身の文明史家黄文雄氏によれば、中国におもねっているからだと言っています。私も同感です。

日本と台湾は共通点が沢山あります。安全、安心、清潔、親切、親しみやすさなどです。これらは明らかに中国とは違います。同じ中国人でありながら、なぜこんなに違うのでしょうか。それは、突きつめれば教育の差です。

日本が中国、朝鮮、台湾を植民地化したことは、紛れもない事実です。中・韓はそれを理由に日本に反省と謝罪を求め、首脳会談を拒んでいます。同じ植民地支配を受けながら、台湾はそのような態度を取っていません。それは当時の植民地政策よりも、日本が撤退した後の政策に差があるからだと思います。台湾が日本と共通点が多いのは、植民地時代の政策を唯一残している国だからです。

日本の植民地政策は、要約すればインフラ整備と教育制度の改革でした。国の発展はこの２つにあります。日本語の強要、創始改名などの批判はありますが、真のネライは文盲の撲滅とさらには人格形成でした。

戦後中国、韓国、台湾は、日本統治時代の鉄道、道路、港湾、下水道、工場などを活用して、経済復興を成し遂げました。今でも中国の大連や韓国、台湾各地にはその当時の施設が残っています。

台湾では日本統治時代の事績を客観的に評価しています。例えば、水利技術者の八田与一です。彼は農業水利事業に大きな貢献をしました。烏頭山ダムと灌漑用水路を建設し、嘉南平野の荒れ地を穀倉地帯にしました。その功績を称え、烏頭山ダムに銅像（左図）を建て、毎年命日には慰霊祭を開いています。

台湾で最初の漆の工芸学校を開き、「台湾の漆工芸の父」とよばれる山中公は、“財産はなくなっても、教育はなくならない”と、全財産を投げ打って、漆器の伝承に一生を捧げました。

（写真は、蓬莱塗り）

李登輝は本省人（台湾人）初の総統として、経済発展、民主化、台湾人の地位向上に多大な貢献をしました。中でも農業改革と教育には力を注ぎ、日本を手本に台湾人の意識改革に取り組みました。李さんはアメリカのコーネル大学を出た後、京大などで学び、台湾の政治指導者としてその手腕は世界で絶賛されています。日本の古典に通じ、鈴木大拙、倉田百三、西田幾多郎などを愛読し、芭蕉をこよなく愛し、「奥の細道」を辿るなど、自らを“半日本人”と称する筋金入りの日本通です。日本人の礼節、武士道を高く評価し、後藤新平を「台湾発展の立役者」と賞賛しています。

これらはほんの一例に過ぎません。これに対し中国や韓国は、統治時代の功績には一切触れようとしていません。それは中・韓が徹底した反日教育を進めてきたからです。日本以上に日本らしい国、それが台湾です。残念ながら、台湾は国際的には孤立しています。親日国台湾をもっと大事にしましょう。

「烏来・新竹旅物語」はこれでおしまいです。お読みいただきありがとうございました。なぜ台湾が親日で、中・韓が反日なのか、その背景については稿を改め、続編として書くことにします。ご関心あればお読みください。

多謝